

## 責任

三年 長島光香

私とれんげは、今から五年前に出会った。私が友達と歩いていると植え木の間から猫の鳴き声が聞こえた。見てみると、そこには土と葉にまみれた、小さな猫がいた。その場所は、車通りの多い道路の近く。私は、このままここに置いていたら食べるものがないし、万が一道路に飛び出したら……と思い、家へ連れて帰った。家に帰って母に伝えると、母は少し驚いているみたいだったが、すぐにダンボールを出してくれた。大きなダンボールに入った小さな猫はすごく可愛らしかった。仕事が終わった父に電話をすると、エサとミルクを買ってきてくれた。お腹がすいていたらしく、猫はすごい勢いで食べ始めた。私の拾ったその猫は、私が世話をするという約束で飼えることになった。私は毎日エサをあげ、猫とずっといっしょにいた。猫は、ラーメン好きな父の提案で「れんげ」と名付けられた。

それから三年が経ち、私は中学生になった。毎日六時間授業、さらに部活動も始まり、忙しかった。れんげの皿にエサを入れるだけで世話を終える日々が続いていた。そんなある日、家を見回したが、れんげが見当たらなかった。探している、れんげは置いてあったダンボールの中で丸くなり、目を細めながらうなっていた。いつものれんげと様子が違ったのですぐ母に伝えた。インターネットで症状を搜

索してみると「尿道閉塞」という病名が出てきた。読み進めると、最悪の場合死に至る、と記されていた。私は鳥肌が立った。動物病院に電話をし、すぐにれんげを連れていった。診察を待っている間、私は心臓の鼓動がどんどん早まるのを感じた。私は大きな責任を感じた。「尿道閉塞」はトイレが汚れるなどで尿を排出できなくなり、尿路が詰まってしまうという病気だった。私が世話をしなかったからだ。「死」を初めて一番近くで感じた。大きすぎる不安を感じている中、診察が終わった、と先生に呼ばれた。先生から出た言葉は、やはり「尿道閉塞」だった。先生によると、手術をすれば助かる可能性は高いという。だがその手術費用は高額だった。私は、れんげを助きたいという気持ちは誰よりも強かった。でも私のせいでこんなことになった、という申し訳なさで、私は何も言えなかった。母は父に連絡した。すると父は、すぐに手術を許可してくれた。

手術が終わわり、れんげは少しの間入院することになった。家には、あたり前のようになっているれんげの姿がない。それから私は、学校が終わると病院に面会をしに行った。れんげはエサを残していた。私が近づき声をかけながらあげると食べてくれた。私の事を覚えていてくれたのだと思い、うれしくなった。だが、れんげに、もうこんな思いはさせたくなかった。これ以上私のせいで苦しんでほしくなかった。動物を飼う、ということがどれだけ大変で責任重大なのか気づかされた。